

論文の内容の要旨

論文題目 日本在住コリアンのニューカマーにおける二言語併用

氏名 吉田さち

(1) 研究の背景と目的

1980年代以降に来日した「ニューカマー」と呼ばれる外国人の増加と定住化によって、日本社会の「多民族化」は急速に進展している（渡戸 2010）。在日外国人のなかで大規模なコミュニティを形成している日本在住コリアンにおいても、ニューカマーの割合は年々増加し、定住化が始まっている（梶田、1994）。それにも関わらず、日本在住コリアンの言語に関する研究は、オールドカマーを対象としたものが主流であった。

本研究は、韓国系民族学校の高校生および韓国人留学生という、日本在住コリアンのニューカマーのなかでも比較的若い世代における二言語併用の実態について、(a)社会的二言語併用と(b)個人的二言語併用という2つの視点から多角的に明らかにすることを試みるものである。

(2) 調査対象と調査方法

日本在住コリアンは来日時期によって、オールドカマーとニューカマーに分けられる。本研究が対象とするニューカマーは、1989年の韓国の海外旅行自由化に加え、日本のバブル景気に伴う社会的制度や経済的状況に誘発されて来日した人々である。彼らの大部分が、留学生、駐在員、日本人や永住者の配偶者などによって構成される（金美善、2009b）。

本研究では、ニューカマーのなかでも韓国系民族学校の高校生と韓国人留学生を対象とする。調査方法は、(a)社会的二言語併用の視点から、アンケート調査を行い、その結果から二言語の能力と二言語の使い分けの実態について分析する。(b)個人的二言語併用の視点からは、親しい友人間の自然談話の収録を行い、主に文内コードスイッチングの実態について分析する。

(3) 研究 1：韓国系民族学校における社会的二言語併用

研究 1 では、韓国系民族学校の高校生 212 名を対象としたアンケート調査を行い、第二言語の能力および韓国語と日本語の場面による使い分けに焦点を当てて分析を行った。

<第二言語習得の実態>

ニューカマーは、来日後短期間で、話しことばの技能から日本語能力を高めていくことが分かった。また滞在期間が長くなるにつれ、優勢言語が韓国語から日本語へと交替している実態が裏付けられた。

<二言語併用の実態>

どの場面でも日本語を使用する割合が高いオールドカマーと比べ、場面に応じて二言語を使い分ける傾向が強い。また、ニューカマーとオールドカマーに共通して、目上や年配の相手に継承語が保持されやすい（生越、2011）ことが確かめられた。「維持型バイリンガル教育」（ペーカー、1996）を行っている学校では、行っていない学校に比べて継承語がより保持されていた。教育内容が第一言語の保持に与える影響の大きさが示唆される。

<移動性を表す指標と言語シフト>

研究 1 では移動性を表す指標を分析に取り入れた。ホスト社会からみて外来性の高い段階を起点としてホスト社会に根ざしていくにつれて、韓国語から日本語への言語シフトが進む様相が連続的に捉えられた。移動性を表す指標は、移住の様相が非常に多様化している近年の移民集団の言語シフトを分析する枠組みとして応用の可能性があることが示唆された。

(4) 研究 2：留学生における社会的二言語併用

研究 2 では、留学生 109 名を対象としたアンケート調査の結果から、第二言語の能力および、ドメイン（Fishman、1972）の概念を用いて、留学生における主要なドメイン（【学校】、【職場】、【宗教施設】、【近所】、【普段行く店】、【休日】、【生活全体】）での二言語併用について考察した。

<第二言語習得の実態>

日本語の受容技能が産出技能に比べて優勢である。これは話しことばの技能が優勢のニューカマーの高校生よりも、むしろオールドカマーの高校生と共通した傾向である。

<二言語併用の実態>

ドメイン別の接触状況と言語使用の関係について分析した結果、休日や教会など私的な領域で韓国人との社会的ネットワークが形成され、韓国語が使用されていることが分かった。宗教ドメインは、少数派言語の言語保持に有効であると言われている（Holmes、1993・

Fishman et al, 1985) が、留学生においても宗教と韓国語使用の結びつきが見られた。今後のニューカマーの言語保持にとって、教会の存在は有効に働くと考えられる。

(5) 研究 3：韓国系民族学校における個人的二言語併用

研究 1 と研究 2 では、場面内での切り替え（コードスイッチング。以下 CS）について明らかにすることができなかった。研究 3 では、韓国系民族学校の女子高校生の親しい友人間の自然談話データを用いて、話者の来日時期（臨界期以降・臨界期以前・日本生まれ）によって文内 CS のパターンがどのように異なるかについて焦点を当てた。

<臨界期以降に来日した話者の文内 CS の特徴>

自己評価の結果から韓国語優勢の偏重バイリンガルであることが分かった。彼らの談話では、韓国語を基盤とする発話のなかで、名詞や引用節の部分のみを日本語に切り替えるタイプの CS が多く見られた。いわゆる「挿入型 CS」の特徴を持つ。

<臨界期以前に来日した話者の文内 CS の特徴>

自己評価の結果から、彼らは均衡バイリンガルであることが分かった。彼らの談話においては、節間や節内で複雑な切り替えが起こっているため、基盤言語が判定不可能な発話も多く見られた。文内 CS では日本語を基盤とする割合が高く、日本語基盤の発話では、韓国語の名詞や節への切り替えが多いものの、多様な項目で切り替えが行われていた。彼らの CS のタイプは、「交替型 CS」の傾向が強いと言える。

<日本生まれの話者の文内 CS の特徴>

自己評価の結果から、三人が均衡バイリンガルで一人が日本語優勢の偏重バイリンガルであることが分かった。BC と同様、日本語が基盤の発話が多く、次いで基盤言語が不明の発話が多かった。日本語基盤の発話では、名詞や節の切り替えに集中している。韓国語基盤の発話では、日本語の接続詞や感動詞への切り替えが多く見られた。談話レベルでは、BC と似た「交替型 CS」の傾向が強いと言える。

<来日時期と文内 CS の関係>

韓国系民族学校の高校生の間では、来日時期が遅い（臨界期以後に来日）グループでは韓国語の発話に日本語の要素を挿入するタイプの CS が行われていた。一方、来日時期が早い（臨界期以前に来日・日本生まれ）グループでは、発話内の多様な要素で韓国語と日本語を交互に切り替えるタイプの CS が行われていた。

このような傾向は、世界の移民集団に共通する特徴である、「L1 を基盤とした挿入型の CS から交替型の CS へ移行する一般的な傾向」（Singh & Backus, 2000）と一致するものであった。

(6) 研究 4：留学生における社会的二言語併用

研究 4 では、滞日期間の比較的短い、大学院の女子留学生における友人間の自然談話データを用いて、彼らの文内 CS の実態について分析した。

<留学生の文内 CS の特徴>

留学生の談話では主に韓国語が使われており、混用コードが使われる場合も、その基盤言語は多くの場合、韓国語である。混用コードでは、韓国語を基盤として日本語の単語を挿入するという、挿入型 CS の性質が強い。

この特徴は、臨界期以後に来日した高校生の CS の特徴と類似している。ただし、臨界期以後に来日した高校生以上に、発話での韓国語使用の割合や、文内 CS での日本語の単語への切り換えの割合が高かった。臨界期以後に来日した高校生よりも留学生の方で使用言語がより韓国語中心となっているのである。

<集団内でのコードとしての混用コード (CS 発話) >

上記の理由として、混用コードが集団内のコードとして定着しているか否かが影響していると考えられる。

民族学校の高校生の間では、日本語と韓国語の混用コードが集団内で広く使用されている (朴良順、2006)。高校生の間では、日常的に複数の言語が飛び交う学校に通う者たちのいわば身内のコードとして、混用コードが存在するのではないだろうか。

それに対して、留学生は、韓国語を母語とし、臨界期以後に来日した人々である。高校生に比べて言語的背景が均質的であり、互いの意思疎通は韓国語だけで十分に可能である。また、彼らは数年後に帰国する予定を持ち、韓国への帰属意識が強い人びとでもある。そういった言語的あるいは心理的な側面が影響し、留学生において混用コードは集団内のコードとして定着していないものと考えられる。

(7) 結論

本研究では、これまで情報の少なかったニューカマーの二言語併用の実態について明らかにした。本研究で得た若い世代の二言語併用についての情報は、今後の壮年層や就業者の特徴と比較する際の基礎的な資料になりうる。日本在住コリアンのニューカマーの二言語併用の全体像に迫るために、今後壮年層や社会人など、その他の世代や属性の人々の傾向を明らかにする必要がある。

また、本研究は、韓国系民族学校の高校生および大学院の留学生という 2 つの集団に対して、社会的二言語併用と個人的バイリンガルの両観点から多角的に考察した点に独自性がある。しかし、個人的二言語併用に関する分析では、文内 CS の特徴を明らかにしたものの、その他の言語的現象に対する分析は今後の課題となった。

これらの課題を今後の研究で蓄積し、国内外の移民の二言語併用および言語シフトに対する理論構築の一助となることを目指したい。